



生活経済ジャーナリスト
和泉昭子

日本FP協会CFP認定者。OLからアナウンサーを経て、現職へ。各種メディアで、お金とキャリアに関する情報を発信中。近著に「自分でつくる理想の年金～これで安心！女性（あなた）のセカンドライフ」（法学書院）

OL economic terms
経済用語事典

セキュリティ対策で注目の「ICカード」

知らない間に預金が引き出されるスキミング被害が急増している。被害状況は、平成16年度上半期だけで前年度の1.4倍（件数ベース）。総被害額は金融庁調べで8億300万円に上るといふ。

スキミングとは、キャッシュカードなどの情報を、スキマーという機械を使って盗み取ること。サイフからカードを抜き取る以外に、離れたところや服の上からデータを読み取る方法もあるといふから、個人の努力だけでは防ぎようがない。

そこで各金融機関は、利用限度額を引き下げたり、パソコンや携帯電話から預金に「鍵」をかける機能を付けるなどの対策を打ち出

している。中でも、にわか注目を集めているのが「ICカード」。薄いプラスチックカードにICチップ（半導体集積回路）を埋め込んだもので、大量の情報を扱えるのがメリットだ。

従来の磁気カードは、カード表面にある磁気データを書き込んでいるため、第三者が情報にアクセスしやすく、データの改ざんや複製が容易という欠点があった。これに対してICカードは、記録した情報を暗号化したり、本人確認のためのデータを書き込むこともできるので、安全性に優れている。ICカードは、既に社員証やETCカード、Suicaなどさまざまなシーンで導入されているが、ようやく

キャッシュカードもIC化されるといふわけだ。

手のひらや指の静脈といった生体情報を記憶させる「生体認証カード」を導入・検討している銀行も増えている。ただし、カードの作成費用や管理維持費がかかる場合があったり、使用可能なATMの数が限られるなど、使い勝手の面では課題が残る。

そんな中、キャッシュカードを発行せず、窓口での本人確認に「合言葉」を使うという、なんとアナログな新型口座を導入する信用金庫も登場。いずれにしても、今後はこうしたセキュリティ面や被害時の補償なども、銀行選びのチェックポイントになるだろう。

▶この記事に関する意見・問い合わせ シティ編集部 ☎03 (5208) 4520